

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 6 日現在

機関番号：24303

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22890161

研究課題名（和文） 限界集落における独居高齢者の生と暮らしの持続可能性の探索

研究課題名（英文） The search for the sustainable life of the elderly living alone in a “Marginal community”

研究代表者

村上 佳栄子 (MURAKAMI KAEKO)

京都府立医科大学・医学部・助教

研究者番号：30584867

研究成果の概要（和文）：

本研究は、限界集落で暮らす独居高齢者を対象に健康の側面、住民のニーズを明確にしようとするものである。独居高齢者が限界集落で生活し続ける意味と、その暮らしを支える要因を検討していくことを目的としている。A市の限界集落に在住するB集落の独居高齢者5名（うち1名息子と同居）の女性（平均年齢83.4歳）を対象に、半構成的インタビュー調査を実施した。分析の結果、対象者の限界集落における生活は、【地域で培ってきた人間関係】、【自然と共存する郷土への愛着】、【生活を支える精神的な強さ】、【健康への自負心】の4つのカテゴリーで構成されていたことが明らかになった。今後、さらに詳細な分析を重ねて、限界集落に住む独居高齢者の健康な暮らしを支える要因を検討し、専門職者による支援の視点について、示唆が得られると考える。

研究成果の概要（英文）：

This study was conducted on elderly persons living alone in a marginal community for the purpose of identifying health aspects and the needs of residents. The two main objectives of this study are indicated below.

The first objective was to clarify the significance and meaning of continuing to live in a marginal community for elderly persons living alone. The second objective is to examine those factors that support such a life.

A survey was conducted in a community B located in city A. The subjects consisted of five elderly women living alone (one of which began living with her son several years earlier), and their average age was 83.4 years. The survey was conducted in the form of semi-structure interviews. The results were determined to be composed of the four categories indicated below.

- (1) Personal relationships build in the community
- (2) Sense of attachment to the natural surroundings
- (3) Psychological strength in support of living
- (4) Confidence in personal health

It will be necessary to conduct more in-depth analyses in the future.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	450,000	135,000	585,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総計	850,000	255,000	1,105,000

研究分野：地域看護学

科研費の分科・細目：看護学 地域・老年看護学

キーワード：限界集落、独居高齢者、生きがい、エンパワーメント、ヘルスプロモーション

1. 研究開始当初の背景

我が国の高齢化率（総人口に占める 65 歳以上人口の比率）は平成 20 年には 22% を超えた。近年、超高齢化社会を迎え、「限界集落」が注目を集めている。65 歳以上人口が自治体総人口の過半数を占める状態を「限界自治体（大野 1991）」と名付け、集落単位に細分化したものが現在の「限界集落」として呼ばれるようになった。「限界集落における集落機能の実態等に関する調査（財団法人農村開発企画委員会 2006）」によると、限界集落を「無住化危惧集落」という概念で整理し、その数を全国で 1,403 集落と推定している。「限界集落」では、過疎・高齢化に伴って農林業が衰退し、山や畑が荒廃している。若者の転出による人口減少に影響されて公共交通網や商店なども少なくなり、生活するための社会的な基盤が保ちにくい状況が見られている。限界集落地域に残された少数の高齢者だけでは、祭りや自治会活動などの地域住民による活動の継続も困難になる。高齢者は、徐々に限界集落化していく状態を受け止め辛抱強く暮らし続けている。彼らの暮らしを支え継続させている要因とは何なのだろうか？

近年、中山間地域や離島を中心に、過疎

化・高齢化の進行が急速的に増加し、地方自治体の対応が求められている。その中でも冠婚葬祭をはじめ農業や生活道の維持管理など社会的な共同生活が困難な「限界集落」が注目されてきている。本研究は、限界集落で暮らす独居高齢者の生活実態に焦点を当て、健康の側面から、住民のニーズをより明確にしようとするものである。

2. 研究の目的

限界集落で生活する独居高齢者の生活と健康観について分析し、地域で生活を持続する意味について探索する。限界集落に居住する住民が生活し続ける意味と健康な暮らしを支える要因を検討していくことを目的としている。

3. 研究の方法

京都府北部の中山間地域における限界集落に暮らす B 集落の独居高齢者 5 名（うち 1 名息子と同居）の女性（平均年齢 83.4 歳）を対象に半構成的インタビューを実施した。研究対象者には調査の説明書を提示し（録音の許可を含む）研究の目的及び方法を説明し

た上で本人の同意を得られた者を対象とした。また同意後もいつでも中断できる旨も伝え、書面による同意を得て実施した。

基本的属性（年齢、性別、疾患、住居環境）を聴取した。またインタビューガイドの内容は 1)この地域で生活して日頃感じていることを話ししてください、2)そのなかでこの地域で生活するのに困ったことはありませんか？それはどんなことですか、3)では逆にこの地域で生活して良かったことはどんなことですか、4)この地域で生活するために一番大切だと思うことを話ししてください、5)あなたの生きがいや楽しみは何ですか、6)あなたが心身ともに健康で生活し続けるためにはどんなことが必要ですか、7)今後どのような生活を送っていきたいと考えていますか、8)今後この地域がどうあって欲しいですか、の以上 8 項目である。

分析は Grounded Theory Approach を用いて行った。インタビュー内容を逐語化し、逐語録におこし、内容のまとまり毎に切片化を行った。各切片化に対してプロパティとディメンションの抽出を行い、ラベル名をつけた。類似した概念を示すラベル名を集め、説明可能なサブカテゴリー名をつけた。更に類似した概念を示すサブカテゴリーを集め、抽象度の高いカテゴリーにするために統合をした。また、全過程を通して、質的研究の経験者である専門領域の助言を受け、分析結果の信頼性・妥当性を高めるように努めた。

4. 研究成果

限界集落の生活を支える要因としては【地域で培ってきた人間関係】、【自然と共存する郷土への愛着】、【生活を支える精神的な強さ】、【健康への自負心】の 4 つのカテゴリーが抽出された。

【地域で培ってきた人間関係】は、生活を支える集落の人間関係、家族の強いきずな関係が支える地域での生活、他者との交流の 3 つにサブカテゴリーで構成されていた。互いに支えあい、人間関係の距離感やバランスを保ち、地域での強い絆を培ってきたことである。

【自然と共存する郷土への愛着】は、不便な生活環境を含めての土地への愛着、豊かな自然と災害や被害の共存、先祖を守り地域を継承していく想い、地域の衰退にともなう危機感と活性化への取り組みの 4 つのサブカテゴリーで構成されていた。不便な生活環境や動物の被害、自然災害などの厳しい環境を受け入れ、郷土への強い愛着を持ち、これからも住み続けたい想いを強く抱いていることであった。

【生活を支える精神的な強さ】は、仲間での活動や趣味ともつことへの生きがいや楽しみ、精神的な強さを携え前向きで積極的な生きる姿勢の 2 つのサブカテゴリーで構成されていた。仲間と一緒に枒の実を用いたおかし作りの作業を楽しみ、生きがいと、強い精神力をもちながら、限界集落という地域で力強く生活をしていることである。

【健康への自負心】は、生活を支えている健康意識でサブカテゴリーが構成されていた。自身の健康な身体に対して自信をもつ一方、豊かな自然環境で生活することで大病を患わず健康でいられるというとらえ方をしてきたことであった。

対象者は限界集落の生活を 4 つのカテゴリーに示された要因によって、支え、継続していたことが明らかになった。今回明らかになったカテゴリーに関して、とても興味深い見解が得られた。

今後は、地域と対象者を拡大し、更なる調査の継続が必要と考える。さらに詳細な分析を重ねて、専門職者による支援方法について

考えていく必要がある。今年度から若手研究 (B) で引き続き、限界集落に居住する地域住民を支える要因を検討していく予定である。

表2 限界集落での生活を支える要因		
カテゴリー	サブカテゴリー	ラベル
地域で培ってきた人間関係	生活を支える集落の人間関係	地域住民が自ら培ってきた距離感やバランスを保ちながら生活を支える人間関係 隣人の存在による生きていく上での支え 時代の変容にもなう地域交流の形態の変化
	家族の強い絆関係が支える地域での生活	同級生の喪失とつながり 家族という強い絆に支えられた生活環境 遠く離れている息子も地域の一員として協力している 働く子どもの生活状況
	他者との交流	農協や行政職員による見守り 人との交流で自分が役に立つことで生きることの満足感につながっている
	自然と共存する郷土への愛着	生活リスクも踏まえて地域は家であるという土地への愛着 長年生活してきた土地での個人の居場所 出来る限り生活し地域で最期を迎えたい思い 少ない生活費用配分でもそれなりの地域生活が成り立っている実態 自給自足で自分のペースの生活 単車がないと生活できない地域 規則正しい生活
豊かな自然と災害や被害との共存	先祖を守り地域を継承していく想い	恵まれた自然が心身ともに癒す効果がある 自然と被害と災害に囲まれた生活環境 家を守り祖先を守りながら子へ受け継いで行きたい想い 先祖に日々感謝する生活
	地域の衰退にもなう危機感と活性化への取り組み	他地域と連携して地域一体となって活性化していくことへの必要性 地域の衰退に伴う将来への対策や継承の必要性 リーダーを中心とした奥上林の今後の発展と継承者への支援
	生活を支える精神的な強さ	仲間での活動や趣味を持つことへの生きがいや楽しみ 共同作業の負担と支援体制 共同作業から得られた仲間と活動への楽しみ
	精神的な強さを携え前向きで積極的な生きる姿勢	向学心を持ち苦難にも立ち向かう生きる姿勢 前向きに反省をすることが長生きの秘訣 これまでの苦労や苦悩を乗り越え培ってきた精神的強さ 何かをしたいという意欲の継続
健康への自負心	生活を支えている健康意識	健康を維持するために身体的にも精神的にもこころがけていく 健康を維持しながら地域での仕事をした生活を望んでいる 突然の事故から仕事にへの熱意の再確認 病気に対する思いと健康であり続けてきた誇り

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

村上佳栄子、星野明子、大西早百合

日本公衆衛生学会 2011 58 巻 10 号
p352

6. 研究組織

(1)研究代表者

村上 佳栄子 (MURAKAMI KAEKO)

京都府立医科大学・医学部 助教

研究者番号：30584867

(2)研究分担者

星野 明子 (HOSHINO AKIKO)

京都府立医科大学・医学部 教授

研究者番号：70282209

大西 早百合 (ONISHI SAYURI)

京都府立医科大学・医学部 准教授

研究者番号：60290219 (2010)